

第13回銀華文学賞 中間発表 一次・二次・三次予選

●第13回銀華文学賞に御応募いただき、まことにありがとうございます。おかげさまで、日本全国から総数一九六編の作品をお寄せいただきました。心から御礼申し上げます。去る四月三〇日に締め切らせていただき、厳正な一次・二次・三次予選審査を行いました。その結果を謹んでここに発表させていただきます。

無印は一次予選通過者、○印は二次予選通過者、◎印は三次予選通過者です。長いタイトル、複数タイトルは短く省略させていただきます。

第13回銀華文学賞中間発表 一次・二次・三次予選

- 北海道
 - 「家族の絆」 栗山佳子
 - 「赤い金魚」 さとう淳子
 - 「赤い靴」 宮崎てつ子
 - 「王のいない夏」 和田さとし
 - 「ハマネスの花咲く頃」 野原憲次
 - 「夏の日」 K・暁夏
 - 「利休は永久に」 鎌田かをり
 - 「弁当」 家田 満
 - 「愛の香り」 東間征子
 - 「幾千世」 悠希マイコ
- 青森県
 - 「歳のうた」 小山田良三
 - 「黄身子と水仙」 安保美智子
 - 「唄は明日を連れて」 中村公子
- 岩手県
 - 「父子レッスン」 千尺青十
- 秋田県
 - 「酒喰らう男」 佐間瀬友夢
- 山形県
 - 「ラストオーダー」 塩崎憲治
- 茨城県
 - 「イルミネーションの湖」 沼澤篤
- 栃木県
 - 「主役」 友 修二
 - 「帰郷」 門井 了
- 群馬県
 - 「はっこい」 鈴木あぐり
 - 「水解」 島田トミ子
- 群馬県
 - 「和菓子の櫻井」 もろひろし
 - 「ひな菊の墓」 紙屋里子
 - 「幽霊」 本田敬幸
 - 「プロッコリーの欠片」 ユラン
- 埼玉県
 - 「行き合いの空」 秋 檀
 - 「サムライPTA」 山家衛良
 - 「通奏低音」 倉持れい子
 - 「ありふれた出来事」 きなりかず
 - 「風鐸の女」 山崎人功
- 静岡県
 - 「奇老譚―月は見ていた」 しのお愛一
 - 「分子電話」 世秋恭之介
 - 「水辺のメモリー」 土田ひろし
 - 「連夜の女」 馬場 駿
 - 「愛知県」 内紫
 - 「スナガリの声」 MYANNO
 - 「告知」 表松豆杵
 - 「黄金の刻」 高倉摩耶
 - 「蛇を飼う」 高倉摩耶
 - 「三重県」 荒川真人
 - 「山門の別れ」 平安名尚
 - 「神棚毀し」 藤牧初彦
 - 「青春ぼろろ」 藤牧初彦
- 滋賀県
 - 「一色一香の人」 高城 紹
 - 「強制養子縁組」 西木美彦
 - 「強証明」 原浩一郎
 - 「出所証明」 原浩一郎
 - 「京都府」 東田浄土
 - 「初夏の日」 東田ゼンリユウ
 - 「浮き球君の恋人」 上田ゼンリユウ
 - 「よじぼう」 タクロウ
- 大阪府
 - 「再会」 滝尾鋭治
 - 「誓い」 森園哲也
 - 「岸和田合戦顛末記」 中野正文
 - 「訪問者」 加藤清三郎
 - 「マツタケ狂騒曲」 内 久美子
 - 「悔恨」 池永伸二
 - 「七色の涙」 櫻小路駿
 - 「蒼い残滓」 勢 隆二
 - 「銀河荘」 内村今日平
 - 「さくら」 花八千代
 - 「マスク」 眞住居明代
 - 「鰻の香り」 有汐明生
 - 「十津川のせせらぎ」 田中香夏子
 - 「花のまにまに」 栄内唯緒
 - 「死の影」 北沢誠一郎
- 兵庫県
 - 「隠居の登山哀歌」 荒木 徹
 - 「室津の遊女友君」 宮本義則
 - 「油屋旅館の向こう」 高橋カナ
 - 「コンビニ模様」 高見貞幸
 - 「帰ってきたすみ子さん」 浜田加代子
 - 「塩崎勝彦」 塩崎勝彦
 - 「春名紀子」 春名紀子
 - 「大森康宏」 大森康宏
 - 「虫」 待木 啓
 - 「能勢の里山」 川津圭介
 - 「ペーゴマ」 加賀美千六
 - 「兄嫁」 篁はるか
 - 「基盤」 加崎希和
- 奈良県
 - 「ガラスに雨が」 高坂正澄
 - 「Eと老人」 林 晋作
 - 「ニット帽と詩人」 神郷愛光
 - 「夢幻残照」 森兼俊治
- 島根県
 - 「道昭と三蔵法師」 三元タナエ
 - 「八月の残滓」 杉山高志
- 岡山県
 - 「春乃はゆく」 倉坂葉子
 - 「子さらいのまち」 中崎紫紅
 - 「雪消」 大場莊介
 - 「さっと晴れる」 國笠まもる
- 広島県
 - 「どんぐりの詩」 徳安利之
 - 「軋む歯車」 飛葉哲朗
 - 「脱獄犯と蛙」 横山太一
 - 「一本の電話」 伊藤秀輔
 - 「その灯の盾」 宮内 元
 - 「花青素をおひとつ」 いたたまりこ
 - 「鈍色の鉄路」 梶川洋一郎
 - 「ムカデ記念日」 木澤 千
 - 「マリー・アントワネットのお茶会」 菊野 啓
- 香川県
 - 「芝居」 白峰 綾

第13回銀華文学賞中間発表 一次・二次・三次予選

- 神奈川県
 - 「モルタウ」 楽加生
 - 「茜色のカノン」 宮 幸作
 - 「トウランドット」 誰も寝てはならぬ
 - 「アセビの森」 鈴木久子
 - 「追憶の孤独なブラリ散歩パート2」 関口恭徳
 - 「夏の終わり」 福田由紀夫
 - 「棄民の浜」 久保信之
 - 「タカヤスの墓参り」 小林 健
 - 「なんでもあり」 やった」 土井莊平
 - 「いつか日の目を見られるように」 ゴルビー長田
 - 「父の髪」 河野つとむ
 - 「果てなき夢」 青居 空
 - 「新潟県」 柴野裕治
 - 「(仮)」 白河葉
 - 「富山県」 白河葉
 - 「二号」 早月春美
 - 「感謝料は名前だけ」 道谷明俊
 - 「サクロウと朔人」 暗路 II
 - 「今井秀二の手記」 田中 豊
 - 「石川県」 彬コーラル
 - 「郎女物語」 彬コーラル
 - 「福井県」 近藤幹夫
 - 「新しい息子」 近藤幹夫
 - 「山梨県」 近藤幹夫

- 「漆黒の祭り」 大谷重司
- 「ヒロイン」 九条之子
- 「合鍵」 牧 康子
- 「真つすぐ歩く女」 マツイアキラ
- 「M」 池田恵三
- 「見たい夢」 南 理維
- 「奇劇の星々亜衣とミケ、魂の旅」 墨島純
- 「花梨の花」 梨田智光
- 「託された日記」 松本昂幸
- 「毎日が大海日」 太原正裕
- 「牡丹雪」 前岡光明
- 「トランクルーム」 室町 眞
- 「インドの休日」 置始つぐみ
- 「アライブ」 荒川彌生
- 「鳩ヶ谷物語」 谷口 誠
- 「徳淵の津」 竹中 寛
- 「バイ・アンド・バイ」 小石原章子
- 「母と叔父、それぞれの病」 山内 弘
- 「お台場へ」 田中弘司
- 「冬の夢の終わり」 武藤蓑子
- 「熱帯林」 篠崎フクシ
- 「行きずりの人」 東のぶこ
- 「イマジネーション」 佐生綾子

- 愛媛県
○「よじわの茂蔵」 西山慶尚
- 高知県
「出産はオーストラリアで、と娘は言う」 野上史郎
- 福岡県
○「酔芙蓉」 井本元義
○「悪蔵」 脇田 正
○「万華鏡」 有森信二
○「父への想い」 若杉 妙
○「この愛の行方」 柳風亭清三
○「雨が上がる前」 吉岡幸一
○「繡雨」 野見山悠紀彦
「戦争で人を殺した父親を持つ子の行く末」 中野俊明
- 「まぼろしの声」 星野秀水
○「無音の色」 チャコ
○「おとうと」 はるひ
○「ほら男爵の悲しい冒険」 守駿武蘭
- 佐賀県
「気になる木」 岩田へいきち
- 長崎県
○「バタフライ・アリス」 三ヶ島零
- 大分県
○「秋月の朝露」 笠置英昭
「風の輪郭」 見良津珠里子
- 鹿児島県
○「勇者からのメッセージ」 穂積孝博

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方

——作家を志す人のために——

五十嵐 勉

税込 1000 円 御注文はアジア文化社まで

■応募者の皆様へ 第一次・第二次・第三次の選考について

第13回「文芸思潮」銀華文学賞への御応募まことにありがとうございます。第一次・第二次・第三次選考について選考委員会より付記させていただきます。

第一次の選考基準は、他者に伝える文章になっていくかどうか、最も重要な基準点となります。また書く姿勢を加味させていただきました。少し文章が粗くても、他者に訴えたい切実なものが感じられる作品は一次を通過しています。また逆に文章は整っていても、書く姿勢が曖昧なもの、書く必然性が希薄なもの、中途半端なものは落とさせていただきました。この二点をクリアしたものが一次予選通過者です。何%とか、何篇以内とか、数字の枠はありません。したがって、応募者全員が一次予選合格ということもありません。

また第二次予選は、その中でさらに強く何かが感じられるもの、光るものが選ばれます。何かが読み手の中に残っている作品ということになります。一行でもいい、一人の人物でもいい、見方でもいい、何か一つ心に残るようなものがあると、上に

拾い上げたいという、一つの魅力を持っているかどうかのポイントになります。

第三次予選は、よりたくさんの人に読んでほしいような普遍的な力を備えているかが、選考の基準になります。第三次予選まで通過した作品は、だいたい雑誌に載ってほしい、人に読んでもらっても何か訴える力を備えていて、読んだ人の心に何かが残って新たな力になるような作品です。

「文芸思潮」選考委員会では、選考の便宜性を重視して作品数によって制限するのではなく、作品の内容を重視して、優れた作品がたくさんあれば、できるだけその作品の価値やレベルによって、作品を残すよう心がけています。したがって、場合によってはたくさんさんの作品が三次予選、さらにその上に選出される可能性もあります。

どうかこれらの点を御了解くださいますようお願い申し上げます。またご自身の文章力が具体的にどれくらいレベルか、文章力検定も併せてご利用いただけましたら、文章技量向上の一つの目安になると思います。

(銀華文学賞選考委員会)